名古屋NGOセンター ● 会報
NGO=Non Governmental Organization

さんぐりあ

NAGOYA NGO CENTER

vol.120
2019.11（年2回発行）

名古屋NGOセンターの主な活動

1. 地域及び全国的NGOのネットワーク作り
2. NGOスタッフやボランティアのためのセミナー実施
3. 一般市民へのNGO情報の発信
4. 地球市民教育のためのセミナー、フォーラム等の実施
5. 自治体、及び関係機関への提言・協力活動

さんぐりあとは、赤ワインにいろいろな果実を漬け込んでつくる飲み物です。
これを世界にたとえ、さまざまな果実（人々）の個性を損なわず、素晴らしいハーモニーが奏でられるようにと願いを込めて、名付けられました。

次世代のNGOを育てるコミュニティカレッジ「Nたま」。座学（写真左上）、自主企画（写真右上）、フィールドワーク（写真下）など、研修内容は多岐にわたります。

Nたまは多くの人に支えられ、今年17回目を迎えました。Nたまが愛されるわけは？ 総勢232名の受講生は今どのように活動しているのか？ 修了生、主催者側それぞれにたっぷりお話を伺いました。

特集 次世代のNGOを育てるコミュニティカレッジ Nたまに迫る！

NGOトーク スラムの貧困から抜け出すことをめざして

マゴソスクールを支える会 事務局 **松岡 英輝**さん &
認定特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター 理事 **丹羽 輝明**

この会報は再生紙を使用しております

NGO NAGOYA NGO CENTER

logo=designed by THREE

このロゴは[N]をモチーフにし、輪で構成したデザインです。
輪が集まり、その輪が上に伸びていくという
NGOのこれからの活動に期待を込めたものです。

特集

次世代のNGOを育てるコミュニティカレッジ

Nたまに迫る！

Nたまは今年で開講１７回目を迎えます。
これまでに多くの人材をNGO・NPO分野へ送り出してきた
Nたまとはどんな研修なのか？その内容をくまなくお伝えします。

Nたまとは？

「次世代のNGOを育てるコミュニティ・カレッジ（通称　Nたま（NGOのたまご））」は名古屋NGOセンターが主催する社会課題の解決に取り組む人材を育成する受講料98,000円（2019年度）の研修です。研修は7月～翌年2月までの7か月間の期間となっており、社会の現状や、社会課題へアプローチする技術を参加型の研修を通して学びます。NGOに興味がある人、NGOに就職・転職を希望している人、NGOを設立したい人を対象とし、講師陣には東海地方のNGOの第一線で活動している方々を迎えています。また、NGOスタッフと将来NGOで働きたい人のつながりをつくる場や同じ志を持って学ぶ仲間づくりの場にもなっています。

Nたまっていつからあるの？

Nたまは2002年に初めて開講し、以来17回の研修を開いています。過去16回の研修で232名が卒業し、そのうち延べ130名がNGOスタッフとして羽ばたきました。

今年は大学生から社会人まで幅広い年代の受講生が18人揃い、7月28日から講座が始まっています。今年度のNたまの受講生募集はすでに終了していますが、2020年2月8日（土）に行われるNたま修了式では、インターンや講座でお世話になった方々、NGOに興味がある一般の方の前で、Nたま生それぞれがおよそ半年間にわたる研修の学びを発表する機会もありますので、興味がある方はぜひご参加ください。

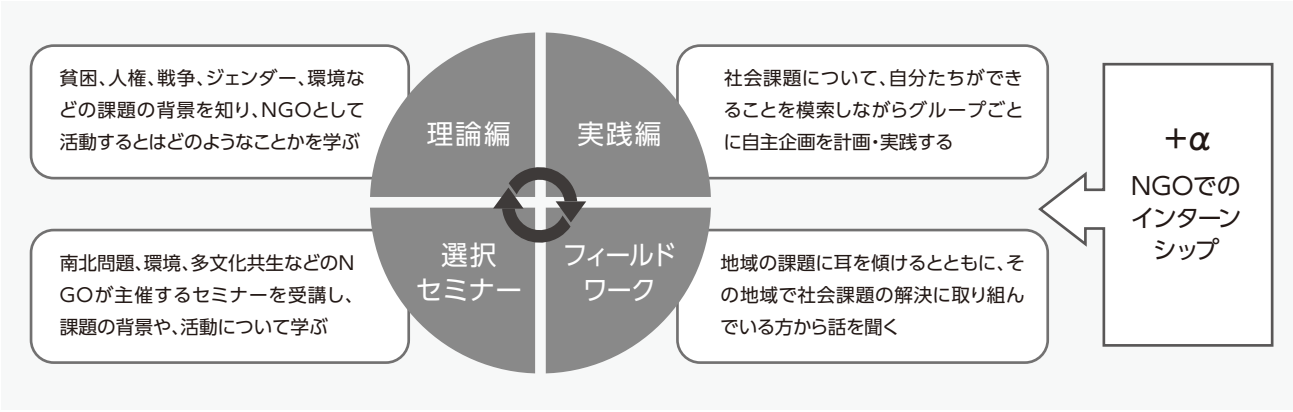
どんな人たちが参加するの？

Nたま受講生には様々な人がいます。学生、企業などで働く社会人、行政職員、教師、定年退職後の方など多種多様な人々が、社会課題をなんとかしたいという想いを胸に受講しています。普段の生活圏では同世代の人、同じ会社の人との会話が多くなりがちですが、Nたまでは老若男女問わず活発な意見交換が行われるため、学生にとっては社会人の考え方に触れる良い機会に、ベテラン社会人にとっては若者の思いを感じる新鮮な機会になっています。

どんな内容なの？

講座内容は大きく4つの分野からなり、理論編や選択セミナーで得た知識・経験をフィールドワークや自主企画で実践するというサイクルで、社会の現状や背景についてバランスよく学ぶことができます。

講座内容の中で目玉となるのが実践編とフィールドワークです。実践編ではここ数年は「子どもの貧困」をテーマとして、3～4人のグループごとに原因を考え、その支援策を半年間かけて企画・実施します。「子どもの貧困」は私たちの身



近にある課題ですが、絶対的貧困ではなく相対的貧困（※）であることや、周囲の目を気にして当事者が支援を求められないことから、周りから課題が見えづらい現状があります。身近にあるけれど手が届きにくい課題に対して、当事者がどのような支援を求めているのかリサーチするところから始まり、どのようにアプローチをするのか方向性を固め、計画し、必要があれば関係団体の協力を得て実施していくという一連の流れを体験します。昨年度は「子どもの貧困」の支援策として4グループが子どもの学習を支援したり、自己肯定感を高めるアクティビティを行うなど、それぞれの企画を計画・実施しました。

また、フィールドワークは高山（協力：まちづくりスポット）と日進（協力：AHI）で行います。高山では「参加型コミュニティ開発を高山で学ぶ」をテーマに町内会の現状や問題点について学び、実際に地区内の住民に聞き取り調査を実施し、調査結果をもとに事前にまちづくり協議会から提示された課題への解決策を発表します。日進では「海外協力におけるNGOの役割とは?」をテーマに開発途上国の健康についての問題分析ワークショップを行います。どちらも泊まりの研修となっており、研修のテーマだけでなく、今後の進路や気になっている社会課題について受講生同士で時間を気にせず語り合える貴重な場ともなります。

このような受講生全員が参加する研修とは別に、希望者

にはNGOやフェアトレードショップでのインターンシップの機会も設けられており、働く側の視点で物事を見ることもできます。

Nたま受講生の修了後の進路は？

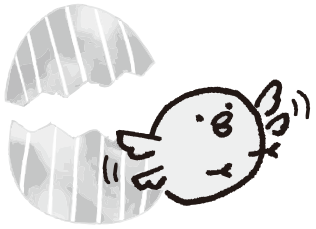
Nたま受講生の修了後の進路は様々です。団体の設立に関わったり、スタッフとなる人もいれば、ボランティアとしてNGOに関わる人もいます。そのほかにも、教員、新聞記者や会社員として途上国で勤務、青年海外協力隊、国際交流協会など、NGOの視点を持って社会で働く人も多くいます。

社会課題へのアプローチには様々な方法があり、それぞれの人が、それぞれの立場で課題解決へ向けた活動をすることできるよう、Nたまではメーリングリストを使い、名古屋NGOセンターや加盟団体の人材募集情報やイベント情報、受講修了生の活動状況などを情報提供し、受講修了後もNGOの活動に触れる機会を提供しています。

※）絶対的貧困と相対的貧困とは

絶対的貧困とは無収入・不定期収入などにより、生命の維持が保てないほど深刻な貧困のことです。相対的貧困とは「その社会の普通の生活（健康で文化的な生活）」ができないほど収入が少なく困窮している状態のことです。日本における「子どもの貧困」は相対的貧困であるため、見ただけでは困窮していることが分からない場合が多く、課題が見えにくいという特徴があります。

（担当：久田、丹羽）



Nたまは講義だけではなくて、受講生同士の対話やフィールドワークなどを通して自らが考えて行動するトレーニングの場でもあります。2人の修了生に、その経験をNGOの現場でどう生かしているかお話を伺いました。

自分たちで決めて自分たちでやる

10期生(2012年度修了)　河合 良太さん

大学卒業時は就職氷河期、転職をしようと活動していた頃にリーマンショックが起こりました。とにかくわけのわからない「不安」にいつも包まれていたような気がします。この社会に対する不安を解消したくて、参加を決めました。

一番印象に残っているのは「自分たちで決めて自分たちでやる」ということです。ソムニード(現ムラのミライ)とまちづくりスポットでのインターン、東北でのフィールドワークや南インド研修などを通じて、社会にある課題を地域コミュニティや市民グループで解決しようとしているのを目の当たりにしました。これまでは特別な人が特別な能力を使って課題を解決するのだと思っていましたが、違いました。自分と変わらない「普通の人」が課題の解決に挑んでいたのです。そしてそれがとても「かっこいい」と思うようになりました。修了時には「自分の足元のこと、地域コミュニティのことを仕事にしたい」と思うようになり、縁あって泉京(せんと)・垂井で働くことになりました。

この夏、東ティモールを訪れました。ポルトガルやインドネシアの抑圧から解放され、フェアトレードコーヒーの生産で自立をめざしている農家さんから「フェアトレードコーヒーを作るようになり、初めて自分たちでお金の使い道を決めることができるようになった」というお話を聞きました。

それはとても誇らしげで、喜びにあふれていました。Nたまで学んだ「自分たちでやる」がここにもあり、フェアトレードがますます好きになりました。

現在は「地域の未来・志援センター」で東海3県の環境団体の支援や大学生を対象にした人材育成などを、泉京・垂井でフェアトレードやごみ減量などを担当しています。さまざまな事業を行っていますが、根底には「自分たちでやる」がいつもあるような気がします。

感謝を込めて

14期生(2016年度修了)　小林 真紀さん

Nたまを受講して以来2年が過ぎました。この間の大きな変化は転職です。これまで、私は公的機関で児童福祉の仕事をしていましたが、今年4月からNPO法人子どもセンターパオに転職しました。パオは様々な問題を抱えた子どもの居場所作りとして緊急避難できるシェルターと、そうした子どもたちが自立して社会に巣立っていけるように支援するステップハウスを運営しています。

Nたまでの半年間は、全ての講義において常に「なぜ?」「この問題をどう考えるのか?」が問われました。そして、仲間と一緒に考えながら見えてきたのは、全ての問題はつながっているということでした。世界はつながっている。それは私ともつながっている。それが分かった時、小さなことでも行動することによって世界が変わるのなら、私にできることで社会貢献をしようと自分の思いが定まりました。

Nたまは社会の課題について学ぶ場ですが、様々な課題を知って考えを深めていくにしたがって、自分の生き方を考えるようになります。それは、私だけではなく一緒に学んだ仲間たちも同じでした。知ることによって世界が広がり、学びを通して物事を見る視点が変えられ、多くの出会いによってさらに人生を豊かにしていく。それがNたまだと私は思っています。

一緒に学んだ仲間たちは今、それぞれの場所で社会に貢献しながら自分の人生を歩んでいます。今回転職した理由のひとつは、そんな彼らを見て私も一歩前に進もうと思ったからでした。学びと出会いを通して私の人生を豊かにしてくれたNたまに、心から感謝しています。

設立当初からNたまの運営を担当している竹内ゆみ子理事に、お話をうかがいました。

竹内 ゆみ子

認定NPO法人ムラのミライ(前 ソムニード)の国内事業担当として高山の本部事務局で23年間活動する。現在、ムラのミライと大和リース(株)とで設立した国内の地域づくり中間支援団体、認定NPO法人まちづくりスポットの代表理事。ソムニード時代から高山でのフィールドワークを引き受けるなどNたま研修事業を17年間続けている。

●Nたま研修の特徴を教えてください。

岐阜県高山市での2泊3日の研修では、まず現地を歩いて課題を見つけて解決策を提案するという経験をしていただきます。知識とメディアからの情報に偏りがちな現在、現場力をどうつけるかが重要です。現場を良く観察して、地元の人と話すことから生の情報を得ることを学びます。観察して何が情報かを知ることも大事です。

Nたまに参加する人たちの多くは、既に基本的な知識を身につけています。しかし、その知識が現場でどう活かされるかの経験が少なく、宝の持ち腐れ状態です。現場では今までの価値観とは違う人に多く会います。彼らがそのような価値観を持つに至るのには、それなりの理由があります。その理由を探ることを現場で身につけて、相手の価値観が分かったところで、自分の主張をどう理解してもらうか、それらのことを体験を通して実践するのが特徴ですね。

●どうしてNGOに人材育成が必要なのでしょうか？

基本的に海外協力も国内活動も、人がその土地でどう生きていくかをサポートすることだと思います。インフラも大切だと思いますが、インフラを作るのも人間です。だから、今住んでいる地域をどうしたいのかを考えられる人が必要になるのです。

●創設時と比べて研修生の変化を感じますか？

創設した頃は、海外のNGOとの関わりを持って海外で活動したいと思っている方が多かったですが、ここ数年は、職場では社会の問題や世界の課題を語ることができないから、そういう課題を語れる仲間が欲しいため参加した、という人の割合が増えてきたように感じます。

また以前は20歳代の方が多かったのですが、最近は50歳代以上の参加者も増えています。

●最後に、Nたま修了生にメッセージをお願いします！

今いる環境の中でできることをする。すると変化が現れます。それは出会いであったり、環境の変化であったりします。その変化にどう自分が誠実に対応していくかです。志は高く、目標は低くです。

昔、世界を変えるには3人いれば良いと言ったマレーシアの環境活動家がいました。志を同じくする自分以外の2人を見つけて動き出すこと。止まっていては何も変化は起きません。

「Nたまサポーター」の募集

創設初年の2002年から事業全体にかかる財源の半分を占めていた外務省の補助金が、今年度初めて受けられなくなったことが今年の6月にわかりました。このときにはすでに2019年度の参加者募集をスタートしており、やる気あふれる未来のNGOを担う方々が応募を考えてくださっていました。そこで約200万円の赤字を覚悟で実施することを決断し「Nたまサポーター」の募集を行い、皆様からの寄付金を活用してNたまをなんとか実施しようということになりました。

その呼びかけに応じてくださり、Nたま修了生をはじめ、加盟団体や個人会員などの皆さまから1,348,840円のご寄付が集まりました（2019年9月30日現在）。未来のNGOを育てる「Nたま」に対する皆さまからの期待を、ひしひしと感じています。

今後もNたまを続けていくために、ぜひ「Nたまサポーター」としてご登録下さい。ご協力よろしくお願いします。

NGOトーク
理事が聞く
最終回(第55回)

スラムの貧困から抜け出すことをめざして

マゴソスクールを支える会 事務局 松岡 英輝(ひでき)さん &
認定特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター 理事 丹羽 輝明(てるあき)

スラムでの暮らし

松岡　ケニアの首都ナイロビには、世界最大級のスラムのキベラスラムがあります。私たちはそのスラムにあるマゴソスクールという小学校を支援しています。

丹羽　スラムではどのように暮らしていますか。

松岡　長屋の一部屋、だいたい4畳くらいの部屋を借りて暮らしています。子どもがたくさんいる家庭が多いです。

男性は警備員の仕事をしている方が多いですね。都会の家やアパート、ホテルでは入口のゲートに警備員を雇うのが一般的です。女性は家政婦をしたり路上で野菜や食べ物を販売している方が多いです。1日100～200円程度の収入でその日の晩ご飯を食べて、仕事がなかった日はご飯を食べないという暮らしです。

栄養失調や過労で倒れる方が多く、スラムでは50代以上の方を見たことがないほどです。人口の半分以上が子どもと言われており、早く亡くなる親が多いため孤児になる子もたくさんいます。

丹羽　とても厳しい環境ですね。どうしてスラムに人が増えているのでしょうか?

松岡　様々な理由でスラムに人はやってきますが、ぼくの周りでは、農村で暮らしていたけど、近年は干ばつがひどくなり、牛が死んだり農作物が取れなくなり、村での生活が困難になって都会へ仕事を求めてやってきた人たちが多いです。スラムは都会にあるため、地方の村よりは仕事があります。

キベラスラムの人口は100～200万人とおよその数しかわからないのですが、10年ほど前は50～100万人と言っていたのです。

丹羽　アジアの途上国とは状況が違うのですね。

松岡　私はベトナムに長くいましたが、アジアでは森や川や海に食べ物はありますが、アフリカでは乾燥地帯が多く、食べ物や水を得るのに苦労する地域が多いと感じています。

マゴソスクール

丹羽　マゴソスクールはどのような学校ですか。

松岡　ケニアの教育制度は初等8年、高等4年、大学4年ですが、マゴソスクールは初等教育にあたります。スラム出身のリリアンさんが1999年に設立した学校で、その後日本人の早川千晶さんが加わり運営しています。

子どもは600人いるのですが、貧しい家庭が多く学校の給食でしか食事をしていない子もいます。そのうち50人は孤児やストリートチルドレンなど特に支援が必要な子どもで、生活費なども負担しています。またスラムの大人の仕事の場でもあります。職業訓練として雑貨も作っています。

丹羽　学習面はどうですか。

松岡　ケニアでは小学8年生で全国統一試験を受けます。受験戦争が過熱気味で統一試験の点数で将来がある程度決まってしまうという面もあるのですが、スラムというハンディを乗り越えて、がんばっていい高校に行く子も多い

東海地域での早川千晶さん全国ツアー

10月31日(木) 19:30～21:00
早川千晶講演会
入場料:2,000円
場所:自由空間八田(名古屋市中川区八田町1002)

11月1日(金) 18:30～20:30
「アフリカの風・命の輝き」トーク&ライブin中津川
場所:坂本公民館ホール
(岐阜県中津川市千旦休1197番10)

松岡 英輝さん

ケニアのスラムにあるマゴソスクールで、必死に学ぶ子どもたちを支援している「マゴソスクールを支える会」。スラムの劣悪な環境を伺いながら支援することの大切さを教えて頂きました。

丹羽 輝明

ですね。

丹羽　教育を受けるのには親の理解が不可欠と思いますがどうですか。

松岡　ケニアは教育熱心な国だと思います。勉強して子どもたちに未来を切り開いてほしいと願っている親が多いと感じています。ただし、ご両親を早くに亡くした子どもは、親戚をたらい回しにされたり、虐待にあうなど、苦労することが多いです。そういう子を救ってマゴソスクールで保護しています。

丹羽　保護されないと子どもたちはどうなってしまうのですか。

松岡　ストリートチルドレンの子たちは、空腹や寒さや寂しさを紛らわすためにシンナーを吸うようになります。パンよりシンナーの方が安く手に入りますし、ケニアは赤道直下にある国ですが、標高が高いため、夜や雨の日は寒くなります。

日本国内での活動

丹羽　「マゴソスクールを支える会」さんはどのような活動をしていますか。

松岡　2015年にマゴソスクールが火災に見舞われて財政難になった際に、組織的に資金集めをしようと、日本国内でマゴソスクールを個別に支援していたメンバーが立ち上げた団体です。20名ほどの運営委員が中心に活動しています。たまたま私が三重県内で事務局をしていますが、メンバーは全国にいます。

丹羽　どのように資金を集めていますか?

松岡　サポータ会員さんが400名近くいて会費を頂いています。それ以外にも定期的に寄付をくださる方もいますし、NGO・企業などの団体からも頂いています。運営にかかわる内部経費については運営委員が出し合ったり、グッズの販売等を行って経費を捻出しています。みなさんから頂いた会費や寄付金はすべてマゴソスクールに送っています。

丹羽　有給職員がいないのにこれほど寄付を集める団体は、あまりないと思います。

松岡　早川さんの長年の地道な活動の成果だと思います。600人の子どもがいるので、とてもたくさんの費用が必要になります。給食費は以前は1食10円の予算で出していましたが、物価が高くなったり、国連のWFPが打ち切りになった影響で、1食50円くらいかかるようになりました。それでも以前より質素な給食となってしまいます。

早川千晶さんは年2回主催されているポレポレキャラバンにて全国を回っています。この秋は9月から11月にかけて行い、東海地方では名古屋市と中津川市で行いますのでぜひお出かけください。マゴソスクールで作ったグッズも販売します。

丹羽　支える会さんのWEBサイトを見ると毎日のように講演会やコンサートがびっしりと組まれていますね。日本国内の支援体制がしっかりしていると感じました。

松岡　実は私もこのツアーに参加してマゴソスクールを知ったのです。

丹羽　ありがとうございました。

（担当 丹羽）

マゴソスクールの子どもたち

団体概要

マゴソスクールを支える会

住所：〒511-0044 三重県桑名市大字萱町54-1
TEL：080-6945-5637　E-MAIL: info@magoso.jp
HP：http://magoso.jp　連絡担当者：松岡英輝

さんぐりあ65号(2006年発行)から13年、55回にわたり「NGOトーク理事が聞く」は、加盟団体が一巡したため最終回となりました。ご支援ありがとうございました。

「～フィリピン・ミンダナオ島　バナナ労働者の声を聞く～ 今、バナナ生産現場で起こっていること」報告

2019年6月19日、アジア太平洋資料センターと名古屋NGOセンター（政策提言委員会）との共催で、フィリピン・ミンダナオ島の日系バナナ農園で働くバナナ労働者の報告会「今、バナナ生産現場で起こっていること」を開催しました。

ポールさん（左）、ジャミラさん（右）

バナナの生産現場で

日本の輸入バナナの現状

日本が輸入するバナナの大半はフィリピン・ミンダナオ島で生産されています。1950年代からミンダナオ島の肥沃な農地を取得してドール、デルモンテ、チキータ、スミフルの四つの多国籍企業が、生産体制を築いてきました。フィリピンにおけるバナナの生産と輸出のシステムは四大多国籍企業によってほぼ独占されていると言っても過言ではありません。日本でもひと昔前はバナナといえば台湾産が多く高級なイメージでしたが、戦後のバナナ輸入自由化をきっかけに爆発的にバナナ消費量が拡大したのです。

生産現場で何が起こっているのか?

報告者はバナナ生産工程の一つである洗浄・梱包工場の労働組合の代表ポール・ジョン・ディゾンさんと組合員のジャミラ・セノさん。二人が働いているのは日系企業スミフルの工場。「甘熟王」の名で知られ、日本のバナナ販売ではシェアナンバーワンを占めているスミフルですが、この現場で大きな人権侵害が行われていることを二人は報告しました。

具体的にどのような被害なのか?

ポールさんによると、労働者たちは短期雇用契約の労働者として19年間契約なしで働いている人や、5か月間の短期雇用を繰り返している人がいるとのことです。会社側は請負いだから正規雇用契約を結ぼうとしないので、裁判に訴えた結果、裁判所はスミフルと労働者は直接の労使関係にあると認めましたが、会社側は法の規定に従おうとしないとのことです。労働組合を結成して改善を要求していますが、会社は団体交渉権を認めず、さらには会社の意向を汲んだと思われる嫌がらせや脅迫を受けている組合員もおり、中には銃撃されて殺された人もいるとのことです。

ジャミラさんもまた10年以上働いていますが、いまだに非正規のままです。有給休暇や病気休暇、産休がなく、安心して働ける環境ではありません。薬品の害から健康を守るために必要なマスクや手袋等の防具も支給されず、健康を損なう人たちもいると訴えました。軍が家に来て組合をやめろと脅され、嫌がらせを受けるなどの被害にあっているとのことです。

二人の訴え

こうした状況の改善を訴えるため、スミフルの株主である住友商事と、スミフルバナナを取り扱う流通小売り各社に面会を求めましたが、販売中止要求を聞き入れませんでした。

最後に二人は「日本の消費者の行動がスミフルに大きなプレッシャーを与えることができる。スミフルのバナナをボイコットしてほしい」と訴えました。

今なお続く

30年ほど前に、農薬の害や低賃金、劣悪な労働環境等の問題が指摘され、広範な消費者運動が起こりました。その頃から指摘されていた問題は今に至るまで解決しておらず、多国籍企業が経営するバナナ農園では、労働者の犠牲のもとにバナナ生産が続けられていることを改めて認識する機会となった報告会でした。

進展

この報告会が行われたほぼ同日、住友商事がバナナの国内販売量で1、2位を争うスミフルグループ（本社シンガポール）の保有全株式（49%）を2019年9月までに売却すると発表（東洋経済ONLINE、2019/7/8記事より）。住友商事は「スミフル株売却と労働問題の間に関係はない」と明言するが、なぜ今手放すのか。住友商事はその理由を「スミフルの今後の成長を考えたため」と説明する。

現状を訴えるポールさん

エッセイ
NGOの散歩道
第30回

面倒に向き合えば

国際会議を歩くのは難しい。

2010年、生物多様性条約(CBD)COP10に参加した名古屋の人は少なくない。193か国（当時）の締約国に対しNGOも意見が出せると期待した人も少なくない。しかし、国際会議の作法は難しい。COPは、2週間をかけて全会一致をめざすため、ステージごとに意見の出し方が異なれば、合意に至るための緻密なルールも存在する。議事進行を知らないと意見の聞き方すらわからない。

国際会議の内容は難しい。

会議だから議題が存在し、議題にそって議論は進む。生物多様性という言葉からイメージされるもの、いきもの、海、川、山…?それだけではない。伝統的生活を維持しつつ生きる先住民の習俗、人権。ビジネス。気候変動、ジオエンジニアリング。遺伝子の塩基配列に、合成生物学。テーマの射程は無限に広い。特許、ジェンダー、SDGsなど社会の潮流も把握しなくてはならない。

多国間交渉の場は時に激しい対立が起こる。交渉で歩み寄れない国には、したくてもできない国内事情があることも多い。知らないとただの偏屈交渉官だけれど、知ってしまうと、たった一人で皆の矢面に立ちながら本国政府と話をつけなくてはならない交渉官の人柄に思い至る。他国の代表が怒って席を立った時でさえ表情を変えないあの人は、どんなジョークに笑うんだろう?

参加するたび「自分は何も知らない」とぺしゃんこになるにも関わらず、COP10 以降のCBD/COP11～14に皆勤賞なのは、やはり議場が描く景色が他にないからだ。最先端の知見と実践が並び、合意形成の最前線では政治も等身大のドラマもある。NGOもその道程に並走しているのだ。

来年秋には節目となるCOP15が開催される。名古屋で大きな成果を上げたCBD/COPは今、次の目標を議論している。今世紀の国際社会で主役の中国が、ホストを務め今後の枠組みが決まる。アジア地区での開催は、この後しばらくない。

COP10では沿道の賑やかしだった私だが、今なら案内もできると思う。一緒に準備し、中国・昆明の議場を歩きまわってみませんか?

一般社団法人JELF（日本環境法律家連盟）事務局　三石 朱美

NGO ノウハウ集

第34回

著作物の引用ができるとき

あなたがNGOのスタッフで情報発信をするとき、別の人の意見を踏まえて書くことが多いだろう。その人の許可を取る必要があるか迷ったりすることはないだろうか。

実は、著作権法上の「引用」なら許可は不要だ。著作権法第32条第1項に「**公表された著作物は、引用して利用することができる。**この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。」と書かれている。引用は、過去の判例を踏まえて次の4つの要件が必要とされている。

（1）公表された著作物であること。

（2）利用者の作品と被利用者の著作物が、カッコ書きや書体を変えるなどして別のものであると明瞭に区分されなければならないこと。（明瞭区分性）

（3）被利用者の著作物が、利用者の作品の従たるものであること。（附従性）

（4）出典を明示すること。

一番わかりにくいのが（3）の附従性だ。引用されるものは「報道、批評、研究その他」という目的の範囲内にあることなのだが、詳しくは「Q&A引用・転載の実務と著作権法　第4版」（中央経済社 北村行夫・雪丸信真吾編 2016年 2,800円+税）のような専門書がオススメ。

逆の場合もある。あなたがネットに書いた文章が勝手に使われる場合がそうだ。いくら「転載禁止」と書いても著作権法上の要件を満たせば止めることはできない。

（担当：丹羽）

NANGOC RECOMMENDS
なんごく　りこめんず

なんごく りこめんず vol.68

このコーナーでは皆様からの「りこめんず」を募集しています。NGOに関するあらゆる"おすすめもの"情報をおよせください。 e-mail:info@nangoc.org
※「NANGOC」とはNAgoya NGO Centerの略です。

内藤裕子のオススメ

BOOK よりよい未来をともに学び・ともに創る ファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編 –他者に関わる力を育もう–

久世治靖、佐藤かおり、田口裕晃、鉄井宣人、二宮由布子、吉岡嗣晃

教育界では一昨年（小・中学校）と昨年（高等学校）に新学習指導要領が発表された。およそ10年ごとに改訂されている学習指導要領だが、今回の改訂では大きな変更があった。例えば「グローバル化」への対応や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の推進が求められている点がそれである。

これはまさに多くのNGOがめざしてきた方向性に一致する流れではないだろうか。特にNIEDが長年実践してきた現代的課題の解決や持続可能な未来を築くという先進的な目標設定に、教育行政の側がやっと追いついたとも言えよう。

この本はコミュニケーションスキルを育むミニゲームなどのアクティビティを50種類近く紹介している。これらのアクティビティを教室や研修などで使うときっとコミュニティが変わるはずだ。

発行　特定非営利活動法人NIED・国際理解教育センター
2,000円+税　　2018年

加藤里紗のオススメ

DVD パッドマン　5億人の女性を救った男

最近、女性の生理についての話題をメディアやSNSでよく見かける。これまで生理に関しては話題に出すことすらはばかられ、大っぴらに話してはいけないような空気があった。この「タブー意識」は一体どこから来るのだろう。

この映画は、生理用品の普及が進んでいなかった2001年のインドが舞台である。女性たちは生理が来ると不衛生な布をまとい、屋外で過ごす。主人公ラクシュミはそんな妻を不憫に思い、安価で清潔なナプキンを作るために奔走する。ほとんど暴走に近い彼の行動に、妻は恥ずかしがって実家に帰ってしまう。女性自身も生理を穢れとして扱っているのだ。

特に印象に残ったのは、初潮を迎えた少女のエピソードだ。少女を囲んで村人たちが歌って踊る。初潮を迎えることは大人になった証であり、お祭りなのだ。しかしその後、彼女は家に入ることができずに、ひとりベランダで眠る。

このタブー意識、このダブルスタンダード。2019年の日本も決して他人事ではない。タブー意識を薄くするためには、性別問わず正しい知識を知り、情報を共有していくことが大切だ。そのきっかけとして、この映画をおすすめしたい。

DVD 3,800円+税
2018年

高橋里加子のオススメ

GOODS BASEY（ベイジー）

BASEYは、現地パートナーと協力し、貝や食用後の牛の角など、パートナーが住む土地で採れる素材から創り出すパーツを取り入れて、アクセサリーやデイリーアイテムを制作するアクセサリーブランド。代表の吉井由美子さんが国際協力機構（JICA）を退職後に立ち上げ、拠点の名古屋の他、全国の百貨店催事やイベントにて商品を展開している。私はフェアトレード商品が多く集まる催事が名古屋栄の三越で開催されることを知り、足を運んだときにBASEYと出会った。

私が一目惚れしたのは、牛の角のネックレス（写真）。食肉の後の廃棄される牛の角が活用されている。天然の素材で作られているので、一つ一つ色合いが異なり個性豊か。複数色ある革紐も選ぶことができてオリジナルのペンダントにできる。他にもカリブ海の国ベリーズで育まれた貝や琵琶湖産の淡水真珠を用いたアクセサリーなども制作している。

ぜひホームページやSNSをチェックして、世界中のパートナーたちと届けるアクセサリーに出会いにでかけてみては。

HP：https://www.basey.jp/　　Facebook：https://www.facebook.com/basey.world/
Twitter：https://twitter.com/baseyworld　　Instagram：https://www.instagram.com/basey_japan/

コラム

イカオ・アコの活動地（フィリピン・ネグロス島）へ同行視察

～マングローブ植樹・現地スタッフとのワークショップ等に参加して～

名古屋NGOセンター理事・事務局長　戸村京子

フィリピンでマングローブ植林を中心に活動する（特活）イカオ・アコの組織基盤強化のため、団体の中期ビジョンの策定や会員制度の再構築等の取り組みに、名古屋NGOセンターが伴走支援として加わることになりました（伴走支援についてはp13で詳しく報告しています）。私はこれまでに数回、イカオ・アコの活動についてヒアリングをさせていただく機会があり、マングローブ植林やエコツーリズムなど環境保護と地域開発、さらに安全な水供給や有機農業への取り組みなど、その都度発展していく活動に深く関心を寄せてきました。

マングローブ・ウェディング

活動地視察 ①マングローブ植樹

6月中旬に、イカオ・アコの新しい職員の木村さんや代表の後藤さんと共にフィリピンへ赴きました。早朝、これまで170万本が植樹されたマングローブの海岸・エコパークを見学して、私たちも苗木を植樹しました。その後マングローブ林の中で、イカオ・アコの現地インターンだった北内美紅さんの結婚式が執り行われ、多くの地元住民の方たちからも祝福されました。マングローブ・ウェディングはイカオ・アコの環境保全のためのソーシャルビジネスの一つとして、これから広く募っていこうと計画されています。

活動地視察 ②高地・山村の有機農業

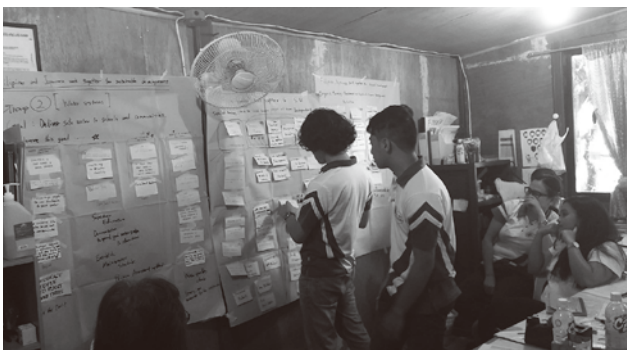
翌日、山村方面へ行き、日本から技術移転したコンポスト・堆肥作りや野菜の育苗ハウス、イチゴ栽培など、有機農業が進められている数か所の畑に行きました。ここではホームステイで学びながら楽しむアグリツーリズムも目指していて、かつての日本の農村に似た風景があり、さらに将来、都市の人々との交流も図る観光農業の先進地でもありました。

海岸部や山村農地の活動地を訪れて、環境を守り、住民の生活向上を目指す、SDGs（持続可能な開発目標）に取り組むイカオ・アコのビジョン・ミッションがよく見えてきました。

現地スタッフとワークショップ

最終日には、イカオ・アコの事務所にて現地スタッフ含め13名で、ワークショップ『SDGsのためのフィリピンと日本の協働作業』が行われました。「有機農業」「安全な水供給事業」「ソーシャルビジネス事業」と3分野で意見交換し、スタッフ各自が自分の仕事、将来の目標など具体的な意見を出し合いました。現地での組織基盤強化や中期計画・ビジョン策定へ向けて、ステップを踏みながら意見が集約されていきました。

今回のイカオ・アコの活動地視察から、名古屋NGOセンターの伴走支援を含め、NGO同士が互いに学び合い協働することで、NGO活動のさらなる展開の可能性を感じました。



現地スタッフとのワークショップ

新理事紹介

理事　中島 正人（なかしま まさと）（公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本“わや”グループ）

いつしか日本社会に人権の危機が…

中学・高校の同窓だった「在日」の友人が、軍事独裁政権下の韓国で無実の「政治囚」として拘束され、6年間を獄中に生きました。彼の釈放後に参加したのが、アムネスティの活動でした。最初に赴任した県立高校の近くにあったことがきっかけで、スタディツアーに参加して以来関わってきたアジア保健研修所（AHI）と併せて、30年ほど市民運動に参加してきました。学校の仕事以外に社会参加する場があったことを、ありがたく思っています。定年退職のタイミングで、理事として関われることに不思議な巡り合わせも感じています。いつしか、日本社会に人権の危機が迫っています。韓国社会の民主主義に遅れをとるようになってしまいました。怒りを覚えています。

理事　坂 茂樹（ばん しげき）（特定非営利活動法人キャンヘルプタイランド　理事）

NGO活動の魅力を若い世代に伝えて行きたい

タイやカンボジアでの教育支援活動に関わり、今年で23年になります。一番の苦労は、日本での活動資金集めです。個人からの寄付金は減少の一途をたどり、企業や団体からの資金援助も簡単には得られない時代になりました。自分の所属しているNGOも活動規模の縮小を余儀なくされ、運営スタッフの高齢化も進んでいます。しかし、どんなに小さな支援活動でも、大きな意味があると信じて今までやってきました。

支援事業の立上げ・資金調達・実施までの一連のプロセスを実行することはとても大変ですが、無事に完了できた時の達成感は格別です。現代の若者にも、からだで感じる達成感を味わって欲しいものです。

※再任役員は以下の14名です。
【代表理事】中島隆宏、八木巌
【常務理事】丹羽輝明、
戸村京子（事務局長）
【理事】浅野陽子、伊藤幸慶、
市川隆之、市野将行、小池康弘、
龍田成人、竹内ゆみ子、松浦史典
【監事】倉地茂雄、横山紀子

退任理事のあいさつ　吉川 典子（よしかわ のりこ）

NGO活動は、貴方にとってどのような存在ですか？前に進む勇気をくれ、生きていく希望になったり、身震いするような深い感動を味あわせてもくれますよね。そんな活動をつないで、支えている名古屋NGOセンター。より良い社会を見つめ、情熱を持った皆様と対話を重ねた日々。地域に種をまき、育み、大樹を茂らせる活動に微力ながら協力でき幸せでした。諸事情でやむなく退任いたしますが、どうぞこれからも宜しくお願い申し上げます。

活動報告カレンダー　2019年4月1日～8月31日

●ネットワーキング
・連合メーデー（4/27）出展
・中部ウォーカソン（5/19）出展
・NPO/NGOの組織基盤強化のためのワークショップ in愛知（5/31）開催
・伊勢志摩市民サミット3周年イベント～SDGsと市民協働～（6/15）開催
・シーテック クリック募金2019（6月～）実施
・横のつながりをつくる勉強会「みっちゃんのうっかりNGO人生?!～国際会議を中心に」（4/24）、「人のつながり方を学ぶ～ハッピネス鞠奴さん、沖てる夫さん」（8/30）開催
・シェアオフィス運営（同居3団体）

●コンサルティング
・NGO相談相談（外務省NGO相談員）：【4～8月364件】
・外務省NGO相談員　出張相談：連合メーデー（4/27）、ウォーカソン（5/19）、ぼらマッチなごや（6/15）、サスティナブル・コ・イノベーションフォーラム（6/17）
・組織基盤強化のための伴走支援（DIFAR、イカオ・アコ）

●情報収集・発信
・会報『さんぐりあ』5月号発行（1,000部）・発送（4/20）

情報発信		4～8月
ホームページ	更新回数	70
	ビジット数	122,944
facebook（フォロワー数1,202人）	更新回数	80
メルマガ（登録数266人）	配信回数	48

コンサルティング

組織基盤強化のための伴走支援に取り組んでいます

「Panasonic NPO/NGOサポートファンド for SDGs」を活用し、(特活)DIFARと(特活)イカオ・アコの2団体が組織基盤強化に取り組んでいます。名古屋NGOセンターは、両団体が円滑に組織基盤強化に取り組めるよう第三者の立場から伴走支援を行っています。

DIFARが「組織診断からはじめるコース」にチャレンジ

理事と事務局で議論(8/3)

ボリビアで活動するDIFAR。現地代表の瀧本(たきもと)里子さんが日本へ帰国するタイミングに合わせ、1月から8月までに全7回の会議を開催し、ミッション・ビジョンの確認、組織課題の洗い出し、解決策の考案などに取り組みました。8/3には理事を交えた議論を行い、7/28に開催した「森の音楽祭」の運営を通して見えてきたことを話題にしながら、ミッション・ビジョンに込めた意味を改めて確認することができました。これらの取り組みに、伴走型コンサルティングを得意とする(特活)アカツキ(https://a-ka-tsuki.org/ 福岡市)と当センターの二者が第三者の立場で参加しました。(特活)アカツキのコンサルティングに対する考え方に触れ、多くの学びを頂き、ともに伴走した私にとっても貴重な機会となりました。

イカオ・アコが「組織強化支援コース」にチャレンジ

フィリピン・ネグロス島で活動するイカオ・アコ。国内の事務局体制を強化しようと、1月から中期計画の策定、人的基盤の強化、会員制度・市民参加の仕組みの構築に取り組みました。5月には中心メンバーが集まり、中期ビジョンの策定にむけたワークショップを行いました。ここでの議論をもとに作成した中期計画(案)をフィリピン・ネグロス島の現地スタッフとワークショップ形式で共有しブラッシュアップしました。

新しく事務局スタッフを雇用し、事務局体制が大きく前進しています。新しく加わった事務局スタッフが中心となり、名簿管理ができるソフトを導入し、メールマガジンのリニューアル発行に着手しました。これまでのスタディツアーの参加者やインターンなどに向けて情報を提供し、イカオ・アコのサポーターを増やしていきます。

当センターの役割は、会議に参加し第三者として意見を述べ、組織基盤強化に向けたアドバイスを行うことです。6月にフィリピン・ネグロス島まで現地視察に行ったことで、議論をすすめる上で共通の土台ができました。現地視察については、11ページで理事・事務局長の戸村が報告しています。

日本で行ったワークショップ(5/12)

(報告:村山)

●政策提言
- ・フィリピン・ミンダナオ島 バナナ労働者の声を聞く～今、バナナ生産現場で起こっていること～(6/19)開催
- ・NGO・外務省定期協議会 全体会議&ODA政策協議会&連携推進委員会へ出席(6/5、7/18、7/23@東京)
- ・NANCiS設立1周年イベント(7/23@東京)開催

●人材・活動育成
- ・「NGOスタッフになりたい人ためのコミュニティ・カレッジ」実施(6/20・23・26・29、7/28、8/4・25)
- ・「3年先が見えないとお悩みのNGOのための研修」フォローアップ&アンケート実施(4～8月)

●運営
- ・総会(5/19)
- ・理事会(4/20、5/19、7/16)
- ・職員会議(4/9、5/28、6/25、7/23、8/27)

オヴァ・ママの会

当会は、近年は対外的な活動は控え、設立（1992年）以来の活動をまとめた報告と、スリランカの養護施設の児童が描いた絵画を通した心理分析のまとめとをあわせた仮称『児童画が映すスリランカ』という書籍の編集を手掛けております。事務局では500点に及ぶ児童画を保存しており、それらの紹介も予定していました。しかし、心理分析を監修していた画家が一昨年末に急逝し、そのため編集活動が大幅に遅れているのが現状です。

さて、活動報告を編集していると、会の活動に豊かな示唆をもたらした書物が記憶に浮かんできます。例をあげれば、中村禮子『わたしのスリランカ』（南雲堂 1985年）、夫の（現）龍谷大学名誉教授中村尚司さんとスリランカに渡った主婦としての生活感あふれたエッセイ集。内藤俊雄『イスル・ソヤ』（同文舘 1990年）、貧しさ故に“イスル・ソヤ”（しあわせをさがして）海外出稼ぎに奔る女性とその家族の行きつく先。田中典子『消されたポットゥ』（農文協 1993年）、勃発した内戦のさなか、タミル人集落での生々しい体験録。富坂キリスト教センター編『傷ついた真珠』（游学社 1995年）、インド洋の真珠と呼ばれたスリランカの自然破壊、貧困、内戦をもたらした日本の援助を告発。いずれも今も問いかける書物だと思います。近刊本では、中川なをみ『茶畑のジャヤ』（鈴木出版 2015年）、登校拒否の小学生がスリランカで出会った少女との交流を描いた童話。伊藤千尋『凛としたアジア』（新日本出版社 2019年）、アジアの小国の在り方が指し示す日本の将来像。これらもお勧めです。

（事務局長　赤羽一郎）

オヴァ・ママの会
〒470-0155　愛知県愛知郡東郷町白鳥4-4-5-201-101　赤羽方
TEL& FAX: 0561-39-2608　E-mail：huna64@qg8.so-net.ne.jp

ボラみみより情報局

ボランティア活動をしてみようと思った時、どうやって募集情報を探しますか？今はインターネットで検索すると、さまざまな情報があふれています。当団体が活動を始めた1999年当時、日本のインターネットの人口普及率は20％あまり、ボランティアをしたくても、ウェブで簡単に情報を見つけられる状況ではありませんでした。実際、現・代表理事の織田はボランティア活動先を見つけるまでに1年を要しました。いざ活動を始めてみると、団体・施設にはボランティアが不足していました。そこで、ボランティアをしたい人とボランティアを求める団体・施設をつなぐため、無料のボランティア情報誌を作ろうと有志4人で団体を立ち上げました。以来、「ボランティアをしたい人と必要としている人々をつなぎ ボランティア・NPO活動への理解と参画をひろげ 自ら問題解決に取り組む地域社会をきずく」という理念のもと、『月刊 ボラみみ』の編集・発行、ボランティア情報サイト「みみライン」の運営をはじめ様々な活動を展開してきました。その活動は多くのボランティアスタッフによって支えられています。現在、10代～70代のボランティアスタッフ70名が、「事務局チーム」「編集チーム」「配達ボランティア」など、チームに分かれて活動しています。

団体創立20周年にあたり、2019年3月から2か月に1回のペースで「これからの20年を考える会」を開催しています。ボラみみらしく、ボランティアスタッフはじめボラみみに関わる様々な方と一緒に、これからの活動の在り方や理念を考えたいという思いからです。1回目では団体立ち上げから今までを振り返り、2回目はボラみみやボランティアを取り巻く現状を確認し、3回目は「未来」に向けてのアイデアを皆さんとワイワイ話し合いました。11月の総会と同時に開く会では、1回目から3回目の話し合いを振り返り、この先ボラみみが果たしていける役割、できることについて考えたいと思っています。

これからの20年を考える会

（事務局　佐原恵津子）

特定非営利活動法人
ボラみみより情報局
〒460-0004　名古屋市中区新栄町2-3 YWCAビル6階
TEL：052-228-7824　FAX：052-228-7834　E-mail：office@boramimi.com

泉京（せんと）・垂井（たるい）

「まちづくりに自ら参画し、行政、事業者・企業などと協働して、より“幸福度の高いまち・垂井”を実現する」ことを目的として岐阜県不破郡垂井町で2005年に発足しました。住民活動が、垂井の地に沸き続ける泉のように、こんこんと力強く展開されるように、また、歴史と文化・環境を大切にする小京都を目指すとの意気込みから、名称を「泉京・垂井」と名付けられました。

現在は「住民が愛着を持って住み続けられるまち」を目指し、垂井町や揖斐川流域で活動をしています。川の流域にはかつて自然資源を活かした持続可能な循環型社会がありました。それは経済最優先で収奪構造ではない、豊かな社会でした。このような流域に学びながら流域単位で地域づくりを行っています。また、地域だけにとらわれず、世界の課題と結び付けながら活動をするのが当団体の特徴です。具体的には、フェアトレードと地産地消の啓発イベント「フェアトレードデイ垂井」や、街中でフェアトレードを応援する「フェアトレードタウン垂井」を目指した活動、アドボカシーの実践者を育成する「あどぼの学校」、揖斐川流域をフィールドに地域づくりを学ぶ研修の受け入れ、まちのゴミ減量などです。このようなことを実施しながら住民が主体的関わる持続可能な地域をめざしています。

第9回フェアトレードデイ垂井

（河合良太）

特定非営利活動法人
泉京・垂井

〒503-2124 岐阜県不破郡垂井町宮代1794-1　TEL：0584-23-3010　FAX：0584-84-8767
E-MAIL:info@sento-tarui.org　HP：http://sento-tarui-blog.cocolog-nifty.com/blog/

会員・寄付者、協力者の紹介（順不同・敬称略）

2019年3月1日～2019年8月31日

●賛助会員（個人）

【更新】

＜賛助会員A＞佐藤都喜子、六鹿直樹、五十川有希子、西口のぞみ、髙木雅成、北奥順子、近田千波、松尾朋之、小池康弘、裏見登志子、山岡要子、吉岡嗣晃、野田真里、奥田奈美、佐藤玲子、矢内淳、龍田成人、中島正人、髙田信英、岡田雅宏、清水光子、名嶋聰郎、山本卓也、福田正博、中島正、蒲池卓巳、矢田昌史、塚田涼子、山口大輔、平井英司、山田隆円、堀田妙子、原田篤実、畠中順也、松田則雄、白井悠、山崎眞由美、東憲吾、小池達也、加藤美紅、斉藤順子、門田一美、桃井義博、水野洋計、吉田英一、蟹江舟美、谷川毅、今井田正一、藤井典夫、清水淳、後藤眞利、田中幸男、海野香織、轡田容子、久野博司、加賀美薫、三田禮子、吉川典子、兼松真梨子、川島紀之、岩田崇、笠原聡太郎、長町諭

＜賛助会員B＞竹内智子、久田夏未、日沖修、前川拓巳、大川元嗣、近藤公彦、伊藤優佳、株根秀之、藤村昭子

【新規会員】

横山紀子、二宮由布子、とこい、松本慎太郎、春日あかね、塩田匠弥、平沼恵理子、篠田英次、清水杏樹、清水智瑛、水野ひかり、森元裕恵、大岡厚子、安藤澄江、山田淳一、山田紗永子、エヴァンス・オモオモレギェ、進藤信子

●寄付者（物品なども含みます）

伊藤幸慶、松浦史典、（株）シーテック、秋田正己、伊藤武士、宇野菊夫、大島京子、大野博人、水野愛、後藤文昭、酒井俊輝、目加田貴弘、山田志帆、太田貴久、丹羽輝明、近田千波、市川隆之、熊谷禎晃、5/22イカオ・アコ歓迎会、近田千波、5/19ウォーカソン、菅谷菜穂、林かぐみ、アーユス仏教国際協力ネットワーク、山崎眞由美、宝泉寺、藤原欽也、戸村京子

【Nたまサポーター】羽佐田美千代、横山紀子、なごや自由学校、黒田朱里、オヴァ・ママの会、岡谷鋼機（株）、連合愛知、浅野陽子、竹内智子、廣井修平、北村祐人、中島正人、佐原恵津子、轡田容子、竹内由美子、吉岡嗣晃、鉄井宣人、堀川絵美、桃井義博、中田健太郎、山本梨恵、遠山涼子、イカオ・アコ、林滋、福田美津枝、蟹江舟美、藤村昭子、今井田正一、高田浩気、平尾秀夫、伊佐次歩、辻諒、八木巌、龍田成人、堀田妙子、外国人ヘルプライン東海、海野香織、加藤美紅、名古屋をフェアトレードタウンにしよう会、戸村京子、浜田ゆう、菊池邦子、高橋美穂、吉岡あずみ、杉浦祐子、福田正博、蒲池卓巳、田中里枝、木村容子、小久保紀子、笠原聡太郎、松本恭一

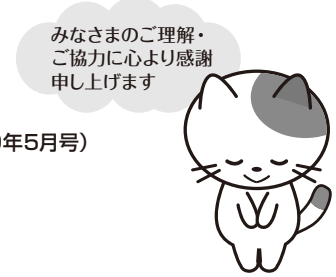
【外貨】夏目、ボラみみ、庭、Amelia、藤村昭子、額公一、横山紀子、とこい、前田直人、澤井勇祐、外国人ヘルプライン東海、塚田涼子、松浦史典、吉川典子、AHI、佐伯、石川、中尾さゆり、土橋偵子、加藤里紗、中島正人、鈴木欽吾、和喜田恵介、山口大輔、前川拓巳、村山佳江、戸村京子、カフェクロスロード、鈴木優里、朴亜紀子

●アフィリエイト

アマゾン・ヤフー698円
楽天1,388ポイント

●会報発送（119号/2019年5月号）

中垣貴裕



名古屋NGOセンター正会員（加盟団体）一覧

45の加盟団体が世界中で活躍しています。

・認定NPO法人 アイキャン
・認定NPO法人 アジア車いす交流センター（WAFCA）
・公益財団法人 アジア保健研修所（AHI）
・公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本“わや”グループ
・認定NPO法人 アーユス仏教国際協力ネットワーク・東海
・(特活)イカオ・アコ
・認定NPO法人 インド福祉村協会
・公益財団法人 オイスカ中部日本研修センター
・オヴァ・ママの会
・オリーブジャパン国際開発協力協会
・GAIAの会（主活動=名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会）
・外国人ヘルプライン東海
・(特活)キャンヘルプタイランド
・国際相互理解を考える会
・ココアゴラ Cocoagora
・(特活)沙漠緑化ナゴヤ
・(特活)泉京・垂井
・(特活)多文化共生リソースセンター東海
・(特活)タランガ・フレンドシップ・グループ
・(特活)地域国際活動研究センター（CDIC）
・(特活)チェルノブイリ救援・中部
・なごや自由学校
・公益財団法人 名古屋YWCA
・南遊の会
・ニカラグアの会
・ハンガーゼロ（一般財団法人 日本国際飢餓対策機構）
・日本バングラデシュ友好協力会（JBCS）
・ハート・フォー・ザ・ワールド・ジャパン
・バングラデシュ保育園の会（B.N.S.A）
・ビニンブラザーホッド トーカイジャパン
・フィリピン人移住者センター（FMC）
・不戦へのネットワーク
・認定NPO法人 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会　ピースあいち
・ペシャワール会名古屋
・認定NPO法人 ホープ・インターナショナル開発機構
・(特活)ボラみみより情報局
・マゴソスクールを支える会
・認定NPO法人 まちづくりスポット
・認定NPO法人 ムラのミライ
・(特活)ル・スリール・ジャポン
・認定NPO法人 レスキューストックヤード
・ACF JAPAN　アジアこども基金
・(特活)DIFAR
・NGO・世界の子どもたちを貧困から守る会
・(特活)NIED・国際理解教育センター

※(特活)は、特定非営利活動法人の略です。
（2019年4月1日現在）（五十音ABC順）

事務局だより

平岩好晴（すばる）（インターン）～9月23日は国連気候行動サミットでした。小泉環境相のセクシー発言で話題となったサミットですが、ある国の若者は世界の国々のトップ達に対し、気候変動問題への積極的な対応を強く求めたサミットでもあります。日本の政府と国民の気候変動・地球温暖化への関心は特に若者の関心は世界に比べて低いように感じます。この機会に多くの人の気候変動への意識が変わっていけばと思います。

編集後記

久田夏未～私がNたまを受講してからもう2年が経ちました。Nたまで一番印象に残っているのは自主企画ですが、私たちのグループは企画内容が1転、2転、3転し、期限ぎりぎりになんとか形になったのでした。一瞬の閃きで良いアイディアが出た！となっても具体的にどこでやる？どうやってやる？と話を詰めていくとすぐに頓挫してしまい、企画を作ることの難しさを身に染みて感じました。そんな苦しみの中から生まれた成果品が、役に立ったという話を後日聞き、とても嬉しかったことを覚えています。あの時の気持ちを忘れずに自分にできることをコツコツやっていきたいなと、今回の特集を通して改めて思いました。

フェアビーンズでは自社製品として、フェアトレードコーヒー、ホットチョコレート、チョコレートなどがあります。どちらもフェアトレード、オーガニック（一部）認証を受けているもので作られています。少しずつ秋が深まる季節に、いかがでしょうか？

フェアトレード雑貨&コーヒービーンズショップ
フェアビーンズ

〒453-0872
名古屋市中村区平池町4-60-7
JICA中部なごや地球ひろば内
OPEN　11:00～18:00
CLOSE　月曜日※祝日の場合は翌平日休業
TEL　070-6412-3279
オンラインショップ
http://fairbeanscoffee.net

発　　行：認定特定非営利活動法人　名古屋NGOセンター
編集責任者：丹羽輝明
会報編集委員：市川隆之、貝谷京子、加藤里紗、桜井裕子、高橋里加子、内藤裕子、久田夏未、村山佳江
協　力　者：廣井修平、中垣貴裕、平岩好晴
レイアウト：久由紀枝
発　行　日：2019年10月18日
印　　刷：山本印刷有限会社

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター
（認定NPO法人）
〒460-0004　名古屋市中区新栄町2丁目3番地 YWCAビル7F
TEL&FAX：052-228-8109　URL：http://www.nangoc.org
E-Mail（代表）：info@nangoc.org